



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町 10-34
カトリックセンター内
TEL 095(842)4450
FAX 095(842)4460

家庭特別委員会の 設置と役割について

長崎大司教
高見 三明

一、設置の経緯と目的

家庭が教会と社会の基礎単位であり要であるということは、誰もが認めることです。実際、教会あるいは社会を構成している一人ひとりの人格は、まず家庭で、特に親、さらには兄弟とのかかわりの中で育まれます。そして、人との愛に満ちたつながりこそが、人のいのちであり、支えであり、真の幸福のもとなのです。ところが、どの家庭も大なり小なり問題や課題を抱えています。中でも人格形成に最も重要な役割を果たすはずの、夫婦、親子、兄弟のつながりが希薄になり、あるいは破壊している家庭が増えていきます。

カトリック信者の家庭も例外ではありません。

さて、家庭を支援するために、2001年度に教区の諸委員会の一つとして「家庭委員会」が設置され、さらに2009年度の教区組織再編で、福音化推進部の中の「家庭福音化担当部」となりました。しかし、家庭の重要性がますます高まる中で、それに対応する特別な委員会の必要が求められました。そこで、2011年度をもって、本部事務局直轄の「家庭特別委員会」を設置することにしました。それは、家庭がキリストの福音によって生かされて本来の姿を取り戻し、あるいは発展させ、さらには周囲の人々に福音の精神

を分かち合うことができるよう助けるためです。設置については、2010年12月16日、司祭評議会にはかり、顧問会の承認を得て決定しました。

二、役割

以下、その役割について述べたいと思います。大筋では、従来の「家庭委員会」や「家庭福音化担当部」が打ち出した活動方針と同じですが、さらなる充実を旨とします。しかし、万能というわけではありません。人間のあらゆる活動と同様、この家庭特別委員会も、結局は、人と人をつなぐためにあると言えます。

1. 家庭の実情の把握

まずは、家庭の状況が複雑になつていきますので、それを絶えず把握する必要があります。信仰の立場から見ると、家族全員がカトリック信者の家庭もあれば、一部の人だけがカトリック信者という家庭もあります。世代の点から見ると、一世代だけ、二世代以上の家族、夫婦だけ、一人暮らしの人もいます。社会状況は、都市部と地方では異なります。母子家庭、父子家庭があります。就業状況も、親あるいは子だけが働いている場合、親が共働きの場合、自営業、

無職、年金暮らしなどさまざまです。

2. 家庭の福音化のための活動

(1) 福音に基づく家庭生活への準備

(a) 堅信式を準備する人たちが、性、いのち、結婚、家庭などについても学ぶことができるよう、ふさわしいテキストを作成する。

(b) 結婚をひかえた人たちのために結婚講座を企画し、実施する。

(2) 家庭が福音の精神に生かされ、周囲を福音の精神で生かすことができるための支援

(a) 家族間のつながりを信仰と愛に満ちた、より強く、より暖かいものにするのを助けるために、たとえば、黙想会あるいは研修会を企画・実施する。

イ・対象は、

- ① 夫婦(マリッジ・エンカウンター)、
 - ② 家族全員、
 - ③ 高齢者、
 - ④ 独身者、
 - ⑤ 別居中あるいは離婚した人など
- ロ・内容は、聖書と教会の教えに基づく、

- ① 自然に即した家族計画、
- ② 家族のあり方、
- ③ 離婚の問題など。

(b) 教区の諸委員会あるいは教会裁判所、専門家、学校、諸運動などの協力を適宜に要請し、彼らと連携する。

イ・信仰養成に関しては、

① 典礼委員会の協力を得て、祈りの環境づくり（家庭祭壇の設置など）を促進し、家族揃っての祈りを推進する。

② 信仰教育委員会と共に、魅力ある信仰教育のあり方を探り、子どもの教会離れの原因を究明し対策を練る。

③ 青少年委員会と協力して、若者が性、いのち、結婚、家庭などに関して学ぶ場をつくる。

④ 生涯養成委員会とともに、聖書の朗読と分かち合いを奨励し、小共同体への参加を推進する。

ロ・社会の福音化推進のために、

① 諸宗教委員会の協力を得て、ほかの宗教とのかかわり方を学ぶ。

② 人権委員会、必要に応じて関連機関とも連携して、人権意識の啓発、家庭内暴力などに対応する。

③ 福祉委員会とともに、家族の中の障害者や病人や高齢者に対して全員が思いやりをもって介護や世話ができるように支援し、ゴミの仕分け、節水などを通して、環境を大切にすることを促すよう親を激励し、独居老人の世話、ピンセンシオ会、レジオ・マリエなどへの参加を勧める。



④ 平和推進委員会とともに、平和の道を学ぶ。

ハ・教会奉仕者等養成に関して、
① 召命促進委員会とともに、家庭を召命の最初の苗床にするためになすべきことを実践する。

② 神学生養成委員会とともに、神学生への支援（祈り、犠牲、献金を継続する）。

家庭の課題は多岐にわたっていますが、教皇庁家庭評議会を参照しながら、積極的に向き合ってくださいと思います。皆様方のご理解とご協力をお願いします。

Q&A



Q・家庭の重要性は分かります。健全な家庭を目指そうという呼びかけも当然です。しかし現実的には、仕事や人間関係や金銭問題など、課題を抱えている家庭ほど教会から遠ざけられているのではないのでしょうか？

A・課題を解決しようとする発想だと、仕事のない人はハローワークへ行きなさい、人間関係ならカウンセラーへ、金銭問題なら役所の福祉課か弁護士のところへ、という指導をしてしまいがちです。悪気はないにしても、「あなたの来るところはここではない」と受け取られることもあると思います。時には、あからさまに「あなたが教会に来るのは迷惑」という態度で接することもあるかもしれません。さらには、「個人的なことと教会に迷惑はかけられない」という信徒の側の思いもあることでしょうか。しかし、真の問題解決は、寄り添うことから始まります。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、負い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」（出エジプト3章7節）。わ

たしたちも、この言葉に立ち返る必要があります。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみの真に人間的な事がらで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起さないものは一つもない」（現代世界憲章1）のです。

Q・家庭を支援する」と言われますが、「祈りなさい」「愛しなさい」と指導することは可能であっても、教会が特定の家庭を具体的に支援することがあり得るのでしょうか？

A・その人の「苦しみを聞き、叫びを聞き、痛みを知った」以上、「よいサマリヤ人」（ルカ10章25節から37節参照）がそうであったように、わたしたちもその必要に応えるために具体的に行動する必要があると思います。188殉教者の列福式の折に学んだように、キリシタン時代の教会は、まさに愛を実践する教会でした。それが、イエスさまが望まれる教会ではないでしょうか。

Q・理想の教会がそうであったとしても、現実の長崎教区の司祭・修道者・信徒にとつては、能力以上のことなのではないでしょうか？

A・それが長崎教区にとつて能力以上のことであるかどうか、長

崎の教会が歩んできた歴史を振り返ってみましょう。信徒発見後の歩み、戦中戦後と苦難の連続でした。それでも、ド・ロ神父様をはじめとする先輩司祭たち、お告げのマリア修道会の母体となった女部屋、永井隆博士など、枚挙にいとまがないほどに神さまへの信頼に基づく愛の実践がありました。今また新たな困難に直面していますが、長崎だからこそ「愛のあかし」ができるのではないのでしょうか。

Q・家庭の実情の把握とあります
が、具体的には誰がどのような方法で行うのでしょうか？個人情報保護法の問題もあると思うのですが……。コンプライアンス態勢は、整えているのでしょうか？

A・すでに教会は信徒籍を管理しているの、住所、電話番号、生年月日などの個人情報外部に持ち出されることのないよう、細心の注意を払っています。今回、家庭の実情把握でさらに注意しないといけないことは、調査がプライバシーの侵害とならないようにすることでしょう。具体的な調査方法、得た情報の適正な管理については、今後、家庭特別委員会に検討してもらおうこととなります。

Q・仮に細かく把握できたとして、そ

れぞれの家庭に適した福音にもとづく為の支援、司牧、指導準備は出来ているのでしょうか？

A・家庭の実情の把握は、これから具体的な準備を始めるにあたっての第一歩です。ですから、情報を整理したうえで、対応を具体的に検討することになります。

Q・福音の精神に生かされるための講座や研修会などは、今までも行なわれていますが、参加者は役員や一部の人たちに限られているように思います。講座によっては、動員をかけて無理やり参加させるような講座もあるのではないのでしょうか？役員や信徒への負担が高まるのではないかと心配です。

A・堅信や結婚などの場合には、教会学校や講座を通してその恵みを受ける準備ができていたことが求められるので、ある意味、無理やり動員しているという印象を持つかもしれません。また、その他の講座にしても、出席しないといけないような圧力を感じて、出たくないのに出席しているという実感を持つている人もいるかもしれません。そして、それが実態であるなら、講座のあり方も抜本的に見直す必要があるでしょう。ともかく、無理やり動員をかけて参加させる講座をやろうとしているわけではありません。あくまでも、実情把

握に基づいて、必要としている支援を提供することを目指しているのです。

Q・同じ長崎教区内でも市内と離島や僻地などでは、生活環境、地域の特性、交通事情など、違いがあります。どこに住んでも研修会や講座など、同じように受ける事ができるのでしょうか？

A・世代、地域、立場に応じて、その直面している課題は異なります。ですから、それぞれに即した、多様な講座が準備されることになるでしょう。その意味で、全員が同じ講座を受けるわけではありません。しかし、その人が必要としている講座なら、どこに住んでも提供できるように配慮する努力は欠かせないことと考えます。

Q・家庭委員会から家庭福音化担当部へ、次は家庭特別委員会へと組織名は変更されますが、活動の実績はどのように変化しているのでしょうか？特別とは何が特別なのでしょう？

A・組織の変遷は、より効果的な活動を目指してなされてきましたが、ある意味では、試行錯誤の面があることも否めません。しかし、それぞれに活動目標を掲げ、それに打ち込んできたことは事実です。ここでその一つ一つを数え上げること

はできませんが、例えば、今年3月の「よきおとずれ」に掲載されているように、家庭福音化担当部は「家庭の黙想会」を開催しています。今回、家庭特別委員会とされたのは、長崎教区の宣教司牧の諸活動を、家庭の視点から推進するためです。なぜなら、信仰養成、社会の福音化、教会奉仕者等の養成という諸活動は、家庭と切り離して推進することができないからです。その意味で、家庭に取り組む委員会は、他の諸委員会と強りに連携し、横断的に活動することが求められることとなるため、どの部にも属さない「特別」な委員会として設置することになったのです。

Q・理想の教会を目指す事は良いことと思いますが、具体的に何を改善し、何をすればよいのでしょうか？

A・聖書や公会議を通して、すでにあるべき教会の姿は設定されているといえます。まずは、それを深く理解し、その理解を共有することが必要でしょう。しかし、その目標のために何をするかは、さまざまです。より効果的な方法でことにあたるために、情報を収集分析し、それを各委員会に提供し、必要であれば自らも独自の活動をするために、家庭特別委員会が設置されたといえるでしょう。

新しい要理

「共に歩む旅」
(29)

第二十七課

「信仰の証人たち」



「進行係」(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)
「二・三人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか」

A・私たちの生活

日本にはじめてカトリックが伝えられたのは1549年です。私たちの信仰の先祖は神を信じるといふ理由で迫害を受け、多くの人々が殉教しました。

「進行係」

「次の文章は二十六聖人の中の一場面を記したものです。どなたか次の文章を読んで下さいますか」

はりきって笑顔のうちに歩いて行くこの少年は、何のために送られているのか知っていたのであろうか。西坂に着いたとき、地面に並べられている二十六本の十字架の列がルドビコの目を引いた。
「私の十字架はどこですか」と彼が尋ね、教えられると探していた宝物を見出したようにその十字架に駆け寄り、その側に跪いた。受洗してから、まだ二年しか経っていないが、ルドビコの澄んだ目は、十字架の奥義を悟っていた。死刑の道具であったその二本の丸太がイエスと結ばれる生命のしるしになる。
豊臣秀吉は恐らく、自分の命令によって殺される人の中に十二才の子供がいるとは知らなかつ

たであろう。役人と執行人は知っていたが、罰の恐れの下に行う人々で、彼らには心の自由がなかった。よくわきまえて自由に自分の道を選ぶのは十二才のこの少年であった。

「ルドビコ様がにっこりと笑ってやりを受けたとき
西坂丘の夕映に
ほろりと散った 梅の花」

(結城了悟「日本二六聖人殉教四百年によせて」
『聖母の騎士』1995年1月号)

「進行係」(参加者に質問する)

①十二才の少年がこれほどの強い信仰を持つことができたのはなぜだと思えますか。

②ルドビコが味わっていたよろこびは、どこから来たと思いますか。

B・神のことば

私たちの信仰の先祖たちは、本人の尊い生命を捧げるほど神を愛しました。彼らにとつて、神はこの世の何ものにも替えられない尊いものでした。彼らがそのような神を愛するようになったのは、神の愛がどれほど大きく深いかを悟ったからです。

「進行係」

「どなたかローマ書8・31-39(神の愛)を読んでくださいませんか」

— 聖書を読む —

「他の方がもう一度読んでくださいませんか」

— 聖書を読む —

「進行係」

「次の聖書の言葉を一人ずつ祈るように読んでくださいませんか。」(同じ言葉を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙する)

「誰が神に呼ばれた者たちを」
(3回)

「苦しみが」(3回)



↑ルドビコ

「引き離すことはできないので
す」(3回)

「私たちが愛してくださる方によつて」(3回)

【進行係】(参加者に質問をする)

① 信仰生活をおくるのにどんな
点が難しいですか。

お互いその難しいことにつ
いて話し合ってみましょう。

② 信仰はあなたに力をあたえ、希
望を与えてくれますか。
それとも単なる知識ですか。

ステファノはキリスト教会の
最初の殉教者でした。ステファ
ノはイエス様のために殉教し、
主にすべてをゆだね、死ぬ瞬間
までゆるしの祈りを捧げました。

人々が石を投げつけている間、
ステファノは主に呼びかけて、
「主イエスよ、わたしの霊をお受
けください」と言った。それから、
ひざまずいて、「主よ、この罪を
彼らに負わせないでください」と
大声で叫んだ。ステファノはこう
言って、眠りについた。

(使徒言行録 7・59-60)。

【参考聖書】

* マタイ 5・10-12…義のた

めに迫害される人は幸い

* マルコ 13・9-13…終わり

まで耐え忍ぶ者は救われる

* ヨハネ 16・33…わたしはこ

の世に打ち勝った

* ローマ 12・14-21…善をも

つて悪に勝ちなさい

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

二十六聖人以外にも日本には
多くの殉教者がいます。教会は
これらの殉教者や殉教しなくて
も、神との係わりを深め人々の
模範とするにたる方々を聖人や
福者として宣言します。
わたしたちは聖人や福者を崇
敬し、そのとりつぎを願います。
さまざまな境遇の中で立派に神
の愛を証した人々の生活は、わ
たしたちの信仰生活の生きたモ
デルです。

【進行係】(参加者に質問する)

① あなたが洗礼名に選んだ聖人
について、調べてみましょう。

② さまざまな聖人がいますが、
共通していることは何でしょ
うか。

【進行係】

自由なお祈りをして集会を終
わります。

【進行係の心得】

殉教とはいのちを捧げて信仰
を証しするという意味である。

何を証明するのかといえは、殉
教者の中にある神の恵みの力の
みならず、この世界にみち満ち
ている神の愛である。神の愛の
証明者は同時にその愛は人間の
自由な心に宿ることを知ってお
り、したがってこの世界には信
仰の自由が保障されねばならな
いことをもうったえているので
ある。

【覚えましょう】

89. どのようにしてカトリック
は、わが国に伝来しましたか。
* 日本に初めてキリスト教を伝
えたのはフランシスコ・ザビ
エルで1549年8月15日鹿
児島に上陸し、その後平戸、
京都、山口、大分へと向かい、
各地で宣教し、多くの人々に
洗礼を授けました。

90. 日本ではなぜ、カトリック
に対する迫害が起こったので
すか。

* 日本の国を治めていた豊臣秀

吉や徳川家康などはキリスト
信者が急に増えてしまうこと
を怖がり、またキリスト教国
が日本を奪ってしまうのでは
ないかと、恐れたためだと考
えられています。

91. 日本の主な殉教者たちはど
のような人々ですか。

* 千六百年前後たくさん人々が
殉教しましたが、その中から、
次のような人々が、聖人、福
者として列せられています。

- ・ 日本二十六聖人
- ・ 聖トマス西と十五殉教者
- ・ 日本二〇五福者殉教者
- ・ 福者ペトロ岐部司祭と百八
十七殉教者

92. 宣教はどのようにしますか。
* 洗礼を受けた全部の信者が、
生活の場で「福音のみ言葉」
を宣べ伝えるとともに、それ
を実生活で証をし、神の国を
広めることです。



新しい要理

「共に歩む旅」

(30)

第二十八課

「永遠の生命」



「進行係」(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)
 「二・三人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか」

A・私たちの生活

予告なしに訪れる死の前で人間は苦しみます。人間は死を前にして自分が無力な存在であることを悟ります。しかし、死をどのように考え、受け入れるかによって、いまの生き方も異なってくる。

「進行係」

「どなたか次の文章を読んでくださいませんか」

「私は今から十数年前、少し大きな病気をして二、三年入院したことがある。病院にいたとき、真夜中になにか獣の吠えるような声が風によって、私の病室に聞こえてきた。初めは病院の実験用の動物が鳴いているのかと思い、翌朝看護婦さんにそれを尋ねたら、実はそれは若いお医者さんとのことであった。彼は肺癌になってしまったので、医者であるために自分が肺癌であることがわかり、毎朝、自分の瞳孔を鏡に映して見てまだ今日は大丈夫だ、今日は死なないですむと言っているほどのしつかりした人でした。しかし、しだいに癌が神経を侵してきて、モルヒネを打っても痛みが耐えられないほどひどく、それで声をあげて叫ぶのだ、ということをお教えしてくれた。『モルヒネも効かなく

なったような患者さんをあなたは どうするの』と聞くと、『しかたがないので手を握ってあげます。そうすると何故か静かになります』という答えだった。」

(遠藤周作『現代の苦悩と宗教』より)

「進行係」(参加者に質問する)

①この文を読んで感じた点をお互いに話し合ってみましょう。

②死を前にしたこのお医者さんの痛みをいやしたのは何ですか。

③人間の一番深く大きな苦しみは何だと思えますか。

B・神のことば

復活なさったイエスは、弟子たちに手と足の釘の跡をみせながら(ルカ24・39)、死者のうちから復活したことを告げ知らせました。イエスは「わたしは復活である」(ヨハネ11・25)「私の言葉を聞いて私をお遣わしになった方を信じる人は永遠の命を得る」(ヨハネ5・24)と言われました。

「進行係」

「どなたかヨハネ11・17・27(復活と命であるイエス)を読んで下さいませんか」

—聖書を読む—

「他の方がもう一度読んでくださいませんか」

—聖書を読む—

「進行係」

「次の聖書の言葉を一人ずつ順番に、祈るように読んで下さいませんか」(同じ言葉を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙する)

「慰めに來ていた」(3回)

「復活する」(3回)

「わたしは復活であり、命である」(3回)

「私を信じる者は」(3回)

「進行係」(参加者に質問する)

①マルタはどのような信仰を告白しましたか。

②あなたは永遠の命を信じますか。

私たちはイエス・キリストが死から復活したように、私たちも死から復活して、神と共に永遠に生きることを信じています。

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とられました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです(1コリント 15・20・22)。

【参考聖書】

- *マタイ 22・23・33.. 死者の復活について
- *マタイ 25・31・46.. 最後の審判
- *ルカ 23・32・43.. 十字架につけられる
- *ヨハネ 5・19・29.. 神の子
- *イエスの権能
- *1テサロ4・13・14.. 主の再臨

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

信じない人たちには、死は絶望であり大きな悲しみですが、信じる人たちには永遠の生命へ

と進む門です。この救いがイエス・キリストを通してすでに私たちに成し遂げられたのです。私たちは神が私たちを死から救い出し、永遠に生きるようにしてくださることを信じます。その永遠の生命は死後に成し遂げられることだけではなく、いまこの瞬間にも継続しているイエス・キリストの救いの業です。私たちが真心で主を信じ、主の言葉どおり生きていくとき、すでにこの世から永遠の生命は始まるのです。

【進行係】(参加者に質問する)

- ①この世の中に亡びないものがありますか。それは何か話し合ってみましょう。
- ②「自分のいのちを救いたいと思う者はそれを失うが『わたし』のために命を失う者はそれを救うのである」(ルカ 9・24)

「わたし」を愛ということばに置き換えて読み、永遠のいのちを得る方法について話し合ってみましょう。

【進行係】

自由なお祈りをしながら、集會を終わります。

【進行係の心得】

わたしの死とキリストの死。わたしの復活とキリストの復活が、どのように一致するのかわかろう。

永遠とは時間ではなく、愛そのものであり死して滅びないもの、すでにこの世にあることをとらえたい。
自ら自我の死を引き受けることによって人々とともに生きるいのちを得るといふ復活(過越)の秘義を生きていることが、永遠のいのちに生きること。

【覚えましょう】

- 93・死のとき、わたしたちのからだどと霊魂はどうなるのですか。

*死のとき、霊魂とからだは分離し、からだは腐敗します。一方、不滅である霊魂は神の裁きを受けにいきます。そして、主が再び来られ、からだは変容させられた姿で復活するとき、そのからだは再び一つになるのを待つのです。

- 94・永遠のいのちとは何ですか。

*永遠のいのちとは、死後、すぐに始まるいのちのことです。このいのちは終わることがありません。これに先立って、

生者と死者の裁き手であるキリストによって一人ひとりに対する私審判が行われます。永遠のいのちは、最後の審判によって承認されます。

- 95・「天国」とは何を意味して

ますか。
*「天国」とは、最高のそして最終的な幸福の状態を意味します。

【終わりに当たって】

これまで三十回にわたり、新しい要理「共に歩む旅」というタイトルで掲載してきましたが、今回をもって完了いたします。長い期間愛読いただき心から感謝いたします。

初回号でこの要理の考え方や特徴などを述べましたように、本書をもとに分かち合いを行うことが何より大切です。家庭やグループ、地区集會などで是非利用してください。きつと、神様が豊かな実りを与えて下さると思えます。(完)





一般社団法人・

全国人権教育研究協議会

代表理事 石村榮一

8・多数派・少数派

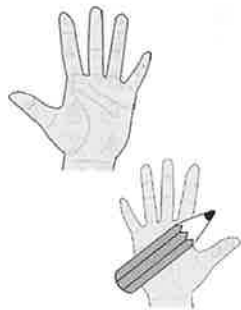
人権感覚が豊かかどうかを、自分で確かめてもらおうと思っております。

まず、左手を上げてください。その左手が一番美しく見える形をつくってください。そう、ゲンコツにされても、ピースにされても、オームの法則の三本指の形でも結構です。それを、レジュメの裏紙に3分以内で書いてください。その後、私が質問をいたします。その時の答えて、皆さんの人権感覚が測定できるというわけです。……では始めます。……

ハイ、時間です。ペンを置いてください。では、質問やご意見はありませんか。何か変だぞ。気になる！でも良いのですよ。

そうです。左利きの方には、大変な課題なのです。利き腕を使えないわけですから。しかしその大変さは、右利きの方にはわからない。そして左利きの方は、自分が少数派であるがゆえに、いくら言っても周りの人には理解してもらえないさと、今までの経験から推し測って、その大変さを口にすることをためらってしまう。

言い換えるとこの左手のスケッチは、多数派・少数派の問題を考えってもらう教材なのです。



多数派に属する人の生活は、ご自分の日常生活が滞りなく過ぎていきます。快適さになじむと、私たちの感受性は鈍くなってきます。

『やって当たり前、やるのが当然、出来ないのはお前の努力が足りない』こんな押しつけがましさが出てきやすいのかもしれない。

一方少数派に属する人にとって

は、多数派の常識という無言の圧力を感じ取りながらの日常生活です。自分の思いを飲み込み、目立たないように・目立たないように、万手控え目な行動を自分に課してこられた方は多かったです。

私どもの組織は、一般社団法人・全国人権教育研究協議会と言い、教育関係者を中心とした研究組織です。結成が1953年ですから、57年間、被差別の子どもに寄り添う実践を大切にしてきました。またそれと同時に、差別の現実から深く学ぶことによって、自己の認識の問い返し、自分の立ち位置はどこにあるかを問い続けてきました。そんな私たちが大切に行っている言葉があります。『思いやりから、思いめぐらしへ』という言葉です。もちろん『思いやり』はそれなりに大切ですが、憐れみや同情、時として「上から目線」につながる『やる』『あげる』という一方通行に陥りやすい危険性をはらんでいます。

『思いめぐらし』は、『思いやり』とは違います。

『思いめぐらし』とは、自分が相手に寄り添う言葉です。相手とながりたい、相手をもっと知りたいたい、お互いが支え・支えられる関

係でありたい、そんな願いを表した言葉です。

そうそう、新型インフルエンザの問題も、多数派・少数派の問題でもあるわけです。自分がかかってはいないけど、いま現在、インフルエンザにかかっている人は不安でいっぱいだろうなあと、相手のことを思いめぐらす力、相手に対する温かい想像力、このことがすごく重要だと思います。ところが反対に身も心も細ってしまった患者さんに対して、罵詈雑言。これが昨年の実態。ところが今年はどうです。患者さんの数は増えた。これに比例するように周囲の人のめちやくちな言動は増えましたか。違いますね。ぐっと世の中、おとなしくなりました。患者数と、とんでもない行動とは反比例の関係なのです。少数派があまり少数ではなくなった時、世の中の多くの人はこの現実を受け入れてしまう。こんなとらえ方もできるのではないのでしょうか。

実はこの「左手を右手でスケッチする」という教材は、長崎県人権・同和対策課、教育研修班の傳さんが開発したものです。

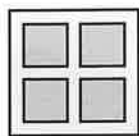
「たくさんの人が階段を下りている時、自分も降りていかなければならないのかと思うと正直に言っ

て怖くなる」。日常的に杖を使う生活をしている友人の眩きにハッとした傳さん。

登り階段で転んでも自分一人が倒れたで済むけど、下り階段だと多くの人を巻き込むから心配なんだと言葉を続ける友人に対して、現実、上りはあつても下りは少ないエスカレーターの設置数です。そして、そのことを気にも留めていない自分を含めた多数派の感覚。

この他者（少数派の人々）を含めて現実をとらえる感覚こそが、思いめぐらしそのものなんだ、そのことを実感してもらうにはどうしたら良いのだろうか？ということに悩んでいる中で閃いたのが、この教材だったんだそうです。

人権教育の大事なキーワードとして、思いやりから、思いめぐらしへとこのスタンスを、講演活動を通して、全国各地、県内全域に、いっぱい、いっぱい届けていきたいと思っています。



9・ジャガイモと友達になろう

受付の時間にお配りした、ジャガイモを使つての学習です。

まずご自分のジャガイモをじっくり観察してください。しばらくしたらこの箱に皆さんのジャガイモを集めます。かき混ぜて、誰が持つていたジャガイモ

モだったかわからなくしたところで、自分のジャガイモを見つけてもらうというわけです。

それでは、ホツチキスで止めている資料もご用意ください。まず、手にされている自分のじゃがいもにふさわしいニックネームをつけてあげましょう。どうしても思いつかなくなったら、ポテトちゃんでも、じゃがチャンでもかまいません。できるだけ個性的なニックネームをお願いします。

次、ジャガイモに聞いてみてください。あなたの好きなものはなあに？

「いま、何歳ですか」、「大きくなつたら何したい」書けるところだけでいいですよ。ところが絶対に書いてほしいもの、それは、ニックネームとジャガイモの似顔絵です。これだけは、是非ともお願いいたします。



時間です。しばしの別れです。じっくりと観察しながら、お別れの言葉をかけてあげてください。それでは今からジャガイモを集めます。ジャガイモをダンボール箱に入れてください。

ではご対面です。そのなから自分のジャガイモを探してください。間違いなくご自分のジャガイモですか。力強いうなずきです。全員が、

再会を果たすことができました。ハイ、拍手です。

さあ、ちよつとお尋ねしてもいいでしょうか。このジャガイモと友達になろうをやってみてどんなお気持ちですか。：自分のジャガイモと会えてうれしかった。：やる前はそんな馬鹿な。自分のジャガイモは見つけられるはずがないよと思っていた…。

どこでやってもこれに取り組む前は、無理、むちゃ、無駄という否定的な意見がいっぱいあるんです。ところが、実際やってみると、20個あつても、30個あつてもほんとうに自分のジャガイモと対面できると。そのことに感激される参加者がいっぱい。そして周りの参加者の様子を見て、改めて、皆さん驚

くんです。たががジャガイモ、ところがされどジャガイモへと価値観を転換してくれます。ジャガイモひとつひとつに固有の個性がある。ましてや人間は…と、物事の捉え方が深まっていく。人は、それぞれが、生まれた時代や場所、育つた環境、めぐり会つた人々、これらが一つ一つ違う。兄弟・姉妹であつてもみんな違う。だからこそ人は違つて当たり前。百人集まれば百通りの違いがあつて当たり前。それを無理やり、型にはめようとすると、そこには大きな悲劇が起こる。豊かな世界を創りだすことを妨げる。そういうことにもつながつていくのかな、そのように思つたりもするわけです。

10・ふるさとから考える

二人ずつ向き合いになつて欲しいのですが、どうやら三人掛けの方が多いうので、三人であつても話しやすいように向き合っていただけです。

それでは皆さんに話し合つていただくお題は、「小さい頃のお弁当にまつわる思い出」ということになりました。お友達と食べた遠足のお弁当でもよいし、家族や親せきも交じつて食べた運動会のお弁当でもよいし、一人ポツンと離れて



食べた悲しいお弁当の思い出でもかまいません。小さかったころのお弁当にまつわる思い出です。一人3分間を目安にお話してください。それでは、お願いします。

時間です。おやめください。いかがでしたか。皆さん、すごくお話がはずんだように見受けられました。時間オーバーの方も多かったようです。それでは今度は、そのお弁当にまつわる思い出が話された、相手のふるさとを徹底して否定してください。理由はいい加減でいいです。聞いた話なので自分もよくわからないんだけどもとか、…ともかく良くないっていう話だよとか、…誰もが言っているんだよとか、このような話の展開が進められてもかまいません。一方、小さい頃に生活をしてきた思い出の住まい・土地を否定された人は、どのような気持ちにな

なっていくのでしょうか。きめつけによって自分の故郷を否定された方は、どんな感情になっていくのでしょうか、その感覚の移り変わりを確かめることができたら良いなあと思っています。でも注意してください。これをやると途中で本気でおこりだす人がいるんです。それだけはお勘弁ください。自分の感情・感覚・意識の移り変わりを確かめるだけで、直接的な行動は抑えていただきたいと思えます。では始めてください。

お尋ねしていいですか。：つらい。：相手に向きになって突つかかる自分がある…とつても悲しいですね。：

これはふるさとということをやつてきましたが、今住んでいる所だったらどうでしょう。ともかくでたらめな理由でずうっと否定をされ続けられたら、先ほど話したようにもうお前とは口ききたくないという感情や怒りが込みあがってきます。それだけ自分のふるさとや住んでいるところは、皆さんにとつてはものすごく大切だと思っておられるわけです。

私の連れ合いとこんな話をしたことがあります。もう20年ぐらい前の話です。

「ところでさ、うちの息子が部落の娘さんと結婚したいというたら君はどうする」と聞いたんです。そしたら、それは本人がいいと思つて決めたことだから、自分は応援をしたい。こんな見事な答えをかえしてくれました。安心しました。ところが私の心の中には、安心できないものが残ったままです。というのは彼女の親戚には、すぐく家系とかを大事にしているっていうか、こだわっているというか、そんな身内がいるんです。だからそこが気になります。「たしかに、あなたはそう考え、そう行動するだろう。でもきみの親戚の人にこのことを話したら、どうなるのかなあ」と言ったら、つれあいは、「そんなら、彼女に、親戚の前ではふるさとをしゃべらんようにとお願ひします」こういうんですね。どういったらいいのかなあと悩みました。彼女は島根県のちっちゃな島の中で育つて、ほんとうに不便なんですよ。でもね、豊かな自然の中でお友達と楽しく過ごしたことをいつも目を輝かして自慢げに私に話をした。

「ちよつと待つてね。あなたは自分のふるさとのことをぼくに楽しそうにしやべつているよ。誰でも自分のふるさとは悲しい思い出も

あるかもしれんけど、とつても素敵な思い出も持っているはず。それをしゃべつてはいけませんということをあなたは人に言える？」すると彼女は、そこでは「はっ！」と自分で気付いたのでしよう。この日らしい彼女は、私が参加する研修会と一緒に参加し、私が読む資料や書籍など一緒に学習を始めたのです。ふるさとを隠すことで生きている。ふるさとを隠すことによって自分の身を必死に守っている。こういう人たちがいます。それは、いわゆる、同和地区の人であったり、在日朝鮮韓国の人であったり、あるいは先ほど話したような、感染症、あるいは水俣、カネミ油症の患者さんたちや身内の方々など、少数派として、いろんな厳しい中で生活を強いられてきた、あるいは今も強いられる人たちは、自分の過去を隠します。ふるさとを隠します。隠さなければいけないような、そんな冷たい社会がまだ日本の現実でもあるからです。一番言いたくないことは、一番言いたくないこと、一番言いたくないこと、それが一番言いたくない、一番言えないことなんだと、…。勇気を出して打ち明けたにもかかわらず、「そんなの関係

ないよ」と言うつれない返事。この人に理解をしめしているようですが、本質的には、とつてもつれない返事なんですね。関係ないさ今の時代。と言いつつ、相手は、関係があるからこそ勇気を出して打ち明けている。にもかかわらず、そういった返事が返ってくる。話してくれただけの思いめぐらしができていない。二重に相手は苦しむ。本当につらいことです。惨い現実です。

**※まとめに変えて
：わかること、それはまず
自分が変わろうとすること、
行動を起こすこと……**

私の尊敬する先輩の一人に、部落解放同盟・長崎県連合会の委員長をされた「中尾寛」先生がられます。彼は、上五島の小さな小さな小さな中学校に技術の先生として赴任した時に、出会った子どもたちにシヨックを受けたと言われます。本町というか、本村というか、そこはすごく豊かな生活をしているのに、(枝村の)カトリックの方たちの部落の人たち、大人も子どもたちも、被差別部落の大人や子どもたちが受けた、受けているそれとまったく同じような、むごい迫害と排斥をうけている。

こんな状況は絶対に許せない、見逃せないと思ったと言われます。そこでむごい差別の現実に出会った、中尾先生がやられたことの一項目は、町が用意した教員宿舎に入ることでなく、そのカトリックの方々の部落の中で、一緒に寝起きをすることだったそうです。そして、この小学一年生が中学校を卒業するまでの9年間ぜったいこの地に留まると決心をされたのです。小中の子どもたちと一緒に登下校。夜は夜での夜間の識字学級。子どもたちは次第に自信と誇りと明るさを取り戻していったというお話です。一番しんどい状況に自分の身を置く。徹底した厳しい子ども側の立つ。そういう覚悟を持ってそこに住むことによつて、人の世がどんなに冷たいのか、そしてまた排斥されてきたその人たちがいかにあつたかくていかにつながりあつて生きているのか。それを学んだというお話をしてくれました。

私がここで一番言いたいこと、それは、私たちは残念ながら、差別が渦巻く社会の中で生活をしていきます。だから、私たちはなかなか差別心を克服できずにいます。いくら神父さんといえどもやっばし差別社会の中で生きていくわけ

だから、どつかで、自分の体のなかにしみついていくんです。そんなしみついた自分が、何かの折にボーンと吹き出てくるわけですよ。それを抑えるためには、正しく知ることが大事ですし、またおかしいぞと自分で自分にストップをかけられる感覚を持つておくことが必要なんじゃないかなと、そのように思います。

「心の車検」です。

車を運転する人はよくおわかりだと思いますが、車を安全にそして周りの人に危害を与えないために、必ず車検を受けることが義務付けられています。大丈夫だよと、保障された車にしか乗ることができません。それと同じように、私たちは人権教育、人権啓発の学習を通して、心の車検を必ず受ける必要があります。あるいは「思いめぐらす」ことによつて、自分の感覚は正常に働いている感覚なのか、歪んだ感覚なのかを、必ず点検する必要がありますのじゃないでしょうか。

最後にまとめとして、繰り返すになりますが人権は英語で表現すると、ヒューマンライツです。これを明治の人が人権と訳したわけ

です。ヒューマンライツのライトは何か。オーライ。ザアットライト。正解だよ。正しいこと、これを守っていると誰もが安心できること。これがヒューマンライツのライトです。人権とは弱い立場にあつても安心して生活できて、その人らしさを発揮できる。そのためになくてはならないものです。人権を人の力といえます。人が生きていくうえで支えになる大事な力、それが人権なのです。

神父の皆さん、今後もいろんな場面に遭遇されると思います。少数派、社会的弱者の人たちが、いかに立ち上がり、そしてみんなと一緒に繋がりが合つて生きていけるのか、いるのか、その経験をいっぱい共有して、より確かな人権の知識と感覚を磨いていただければいいなあと思います。長い間熱心参加していただいた事に感謝いたします。ありがとうございました。
(2010年2月 司祭研修会にて)





「最近はお祈りのできない子が増えた。ミサ中、子供は歌も歌わず、祈りもせずボーっとする。」「堅信ってなんやらか。堅信が終わると信仰まで卒業してしまう。」「高校生も青年もめったに教会には見えなくなった。何を考えているか分からずお手上げ状態や。」「シスターがうちの教会からいなくなった。典礼の準備はどうしよう！子供の要理はどうしよう?!」……信仰教育の現場はいつも主任司祭の頭を悩ませています。仲間の司祭や信者たちと話す、結論はいつも家庭の信仰教育が崩壊していることに行きついてしまいます。「親の信仰がなっていない」と。

でも、親たちも生きることには必死です。共働きの両親。危険から子供を守るために学校や、地域の活動に必死に協力する健気な親たち。信仰をおろそかにするつもりはなくても、クラブ

活動に夢中になるわが子を前に、どのように子供の信仰を育てていけばよいのか戸惑う親たちなのです。背景には混宗婚の問題が横たわり、信者間の不協和音もその要因になっていて、問題は単純ではないようです。教会サイドにはその親たちのSOSを聞いて、対処する場所もなく、ひたすら個々人の信仰心の問題として片付けられているのです。

子供たちをよく観察してみると、ミサの時どうすればよいか分からず、子供だけがぼっとかかっている様子が見えてきます。その中に保護者が寄り添うと雰囲気が変わります。さらに、子供にわかりやすい子供用のミサ式次第を工夫してみると、子供たちは元気に答え始めました。中には「もう覚えたからいらぬ」と言う子も出てきました。聖歌は子供が好むフォーク系の聖歌集を作り、大きな声で歌う練習をしてみると、見違えるように歌い始めます。大好きな歌は喉ちんこが見えるほどです。子供たちに食前・食後の祈りをラミネート版にして、自分の食卓のテーブルに張り付けさせ、家庭で祈らせると、今では90%の子が祈れます。シスターが引き揚げた教会なので、カテキスタもカトリックセンターで信仰養成講座を終えた方々に協力してもらい、やりくりしています。学期の目標を定め、何を教えるか確認し、質問を聞く時間を毎月作るなら、大きな問題はありません。彼らは未熟さを恥じますが、子供たちからたくさん純粋な信仰体験をプレゼントされていることでやりがいを感じています。典礼もたくさん信者さんたちが協力し始めています。失敗だらけですが、まず挑戦したことを一緒に喜びます。彼らにゆとりが出た時、再確認するようにしています。

大切なことは、現状をしっかりと把握すること

からすべてが始まるということです。つまり現状確認は、結論（「親の信仰がなっていない」）ではなく、その人たちをどう育てたいのか。そのためにはまず何から始めたらよいかを考える出発点なのです。

もちろん、小教区だけでは限界があります。そのため、教区の子供から大人まで信仰を養成する責任を持つ部門として、信仰養成部の役割は重大だと感じます。この部は4つの委員会で構成されています。

①「信仰教育委員会」は、小・中学生のカリキュラムとテキスト作成とカテキスタの養成・研修に携わる委員会です。

②「青少年委員会」は、高校生・青年の司牧を担当します。超小教区的視野で青少年活動を行い、全国のカトリック青年とのネットワーク作りをしています。最近では海外研修の企画も手掛けています。

③「生涯養成委員会」は、成人信徒の養成を担当します。聖書と要理の講座が主でしたが、もつと各地区・小教区の信徒に必要な養成について積極的に考える必要があります。

④「典礼委員会」は、典礼が礼拝行為であると同時に信徒の信仰養成の場であることを踏まえて、聖歌部門、研修部門、典礼奉仕者養成部門、式典部門が置かれています。

まだまだ各委員会の力量で活動しているのですが、信仰養成部として一丸となった成果は十分ではないのですが、「もつと小教区信徒のために何ができるか」という視点を持って養成活動を行ってほしい」という声にハッとさせられます。問題はいつもどこに視点を置いてことを始めるかです。教区(教会)に役立つ信徒の養成ではなく、もつと小教区にいる信徒の信仰を支える養成とは何かを考える必要を痛感します。



社会が福音で
満たされるために

福音化推進部



長崎を福音の喜びで
いっぱいにしましょう!

こちらは福音化推進部です。福音化とは？なんて難しい話しはさておき、長崎市内を中心に、毎週夜の10時からホームレス支援活動が行われています。長崎にホームレスがいるの？と言う声もよく聞きますが、10数名のホームレスの方々へ弁当を配りながら自立できるように支援活動を行っています。カトリックの信徒も数名参加しています。

そこに毎週、20代のプロテスタント教会の青年がやってきます。彼は、ホームレスの方々の友となり、共に生きようと寄りそっています。

なかなかのイケメンなのに彼女募集中です。必要なときは、ホームレスの人を病院へ連れて行ったり、入院中の人を見舞ったり、アパートが見つかつた人の訪問をしたりしています。その若さで、長崎にフードバンクを立ち上げようと

しています。フードバンクとは、品質には問題がない商品価値を失った食品を業者からもらい受け、生活支援の必要な方々に分かち合う市民団体です。食で困窮している人は、学費や家賃を払って一人暮らしをしている学生や大黒柱を失った家族にもいるからです。長崎県は経済的には豊でないし、探してみると結構いると思います。彼は、見た目も特別真面目な青年というわけでもない普通のイケメンです。でも、福音を生きっていると尊敬します。

カトリックには、マザー・テレサという素晴らしい模範者がいます。マザーが始めた活動は、恵まれない人の救済というより、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人共に泣きなさい」(ロマ12・15)という神の愛と福音の伝達です。キリシタン時代には、「ミゼリ・ユルディア会」という慈悲の会があり、信徒の方々の持ち物を出し合いながら、生活に苦しむ方々への支援活動やハンセン病の方々などへの手厚い介護が行われていました。終戦後の貧しい中でも、ビンセンシオ会など信徒の方々の持ち物を出し合いながら病人や家庭訪問が活発に行われていました。

2015年、信徒発見150周年を迎えようとしている長崎教区は今、過去を振り返り、未来に責任ある行動を取っていくようとしています。何をどうしているのか漠然としているようですが、簡単に言うと、キリスト教の信者からみこどばを生きるキリストの信者への体質改善が求められています。

福音化推進部は、長崎のカトリック教会が福音書のキリストのように生きるための糸口を次の4つの委員会で提供します。

《平和推進委員会》憎しみや争いをキリストの愛と平和に代える一助として社会に奉仕する会

です。

《福祉委員会》助けを必要としている人の友となつてキリストの愛を運ぶ一助として社会に奉仕する会です。

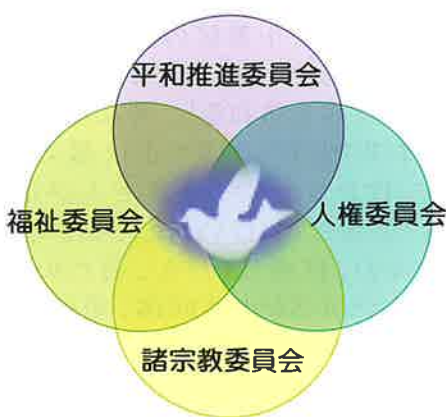
《人権委員会》偏見や差別で苦しむ人にキリストの解放と自由をもたらす一助として社会に奉仕する会です。

《諸宗教委員会》キリスト教の別れた兄弟たちとの一致と神を信じる他の宗教の方々との協力を通して社会に奉仕する会です。

もつと具体的なものを示すべきですが、教区の諸委員会は今年度から、特に福音化推進部は一部を引き継いでほぼ一新されるので、これらの委員会が福音を生き福音をもたらす委員会となるために、今まさに話し合いが行われているところとす。

この委員会は、カトリックの誰かが行うクラブ活動ではなく、キリストを生きようとするキリスト者の使命を生きるためのものです。社会が福音で満たされるように働くことは、堅信を受けた者の使命でもあるからです。あなたもその一人です。

福音化推進部





とっても大切なもの

母から私へ、娘から孫へ、
信仰のバトンを繋げましょう!



数年前の話になりますが、大阪教区のカテドラル(玉造教会)で、主日のごミサに参加した時のことです。幼稚園の年長さんぐらいの女の子を真ん中にして、若い家族が座っていました。ごミサの途中で女の子の体が、後ろの席に座っている私の聖歌集に当たって落ち、あっと思った瞬間、父親が振り返り、「すみません」と軽く頭を下げました。母親も気づいたようで、「すみません」と小さな声で詫びられ、両親の様子に気づいた女の子も、「ごめんなさい」と謝りました。当たり前のことと言えばそれまでなのでしょうが……当たりのことを自然にさりげなく出来るその時の家族の姿は、とても微笑ましく、あたたかい空気に包まれているように感じました。子どもと一緒にごミサに参加する様子は、家族の原点を示しているようで、無言の福音宣教だと思いました。今の私に出来る福音宣教、信仰宣言は何だろうか考えた玉造でのごミサでした。



カトリックセンターで結婚講座が開催された時のことです。この講座は8回コースで構成されており、これから結婚しようとするカップルに、信徒の方々が結婚生活の先輩として、それぞれのテーマに沿って、実生活の体験を話されることになっていました。6回目のテーマは、「よりよき夫と妻、父と母を目指して」で、その日はご夫婦で講師を担当された奥さんの誕生日でした。奥さんは「誕生日といえばプレゼントを受け取る人が多いと思いますが、私は自分の誕生日には、“お母さん、私を生んでくれて、育ててくれてありがとう!”の意味で、毎年母にプレゼントをしてきました。今はもう渡すことが出来なくなり、寂しくなりました」と。また、「よき夫と妻を目指すことで、よき父、母になれるですよ。」とも話されていました。夫婦の対話の大切さや命の大切さなど、若いカップルの方々にもわかりやすいお話しでした。既に結婚生活を送っている私ですが、“よき妻を目指し、よき母になりたい”と改めて思いました。そして、今年は自分の誕生日に、“育ててくれてありがとう。神様と出会わせてくれてありがとう。”の意味を込めて、母にプレゼントを贈りたいと思っています。

ある年のご復活祭での出来事です。時々侍者をしている男の子が、真新しい学生服を着て、家族でごミサに参加していました。その姿を見て、“ああ、あの子は中学生になるんだなあ〜”と思いながら、まだ入学式前だと気づきました。「今日のご復活のお祝い日、特別な日ですよ。」と、子どもに伝える母親の気持ちが、現れているように感じました。

私も小さい頃、クリスマスになると、お正月よりも先に新しい洋服を着せてもらい、ご復活には新しい靴・・・など、母が「祝い日があるから」と準備し、一年の典礼の時をしっかりと私に伝えていたことを思い出します。私はどうかな?と、振り返ると少々疑問が残ります。母から受けとった“信仰のバトン”、これからでも私なりに繋いでいきたいと思っています。母として、信仰生活、結婚生活の先輩として。



私の母は大正13年生まれの87歳。

足が不自由になってから、介護施設でお世話になっています。その母は施設内で信者さんを見つけては、一緒にお祈りをしているようです。どのように見つけるのか尋ねると、「ご飯ば食べる時にわかるたい。ちとことばするけんで、あんた信者さんねえ?」と声をかけるそうです。夕方になると、動けない人の部屋で、夕の祈りを一緒にするようで、「一人で祈れば忘れてたり、眠ってしまうけん。一緒に祈ると。私ば待とつと。“毎日のミサ”も私が読みよつと。」と言います。私は、「お母さんはまるで神父様みたいね」と冗談を言ったりしますが、無学で読み書きが苦手なのに、不思議です。「お母さん、字は読めると?」と聞くと、「読めん字はとばして読みよつとさ。うそはつかれんけん。」と話します。「よきおとずれ」や小教区の新聞も同じです。意味が通じるのかな?と思いますが、楽しみにしているようです。施設を訪ねると、時には「今は〇〇さんの所にお祈りに行ってますよ」と教えられます。杖をつきつき、介護老人が介護老人訪問です。「お母さんは偉いねえ」と私が感心すると、「なあ〜んの、信者じゃけん、当たり前たい」と応えます。小さな小さな小共同体、頑張れ! 当たり前のことがなかなか出来ない私です。(きみこ)

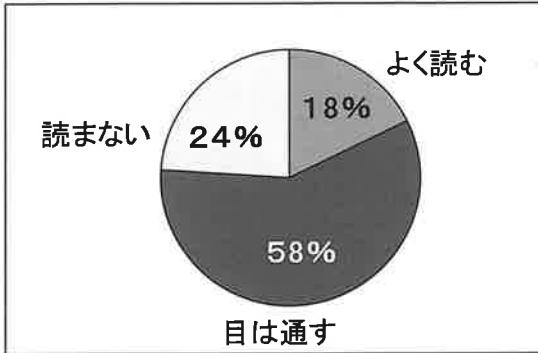
一億の人に一億の母ありなんも
わが母にまされる 母ありなんや (曉鳥 敏)

アンケートの結果

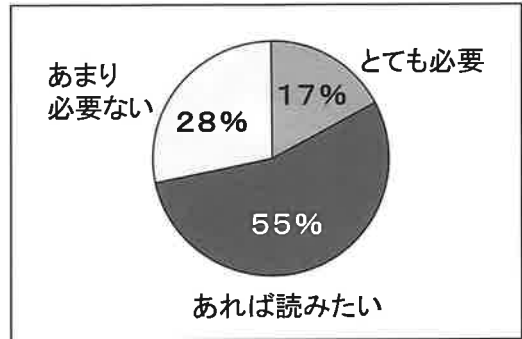
昨年秋、各小教区の司祭、信徒の代表者5名の方々へ、『言の波』のアンケート調査に対するご協力をお願いいたしましたところ、下記のような結果となりました。頂いたご意見、ご提案をもとに教区本部事務局としては、問題点の改善、編集体制、内容、方向性など『言の波』の更なる充実を図る必要性などについて協議を重ね、更なる発展を目指すことになりました。

ご協力ありがとうございました。今後とも、『言の波』のためにご意見、ご提案をよろしく願います。

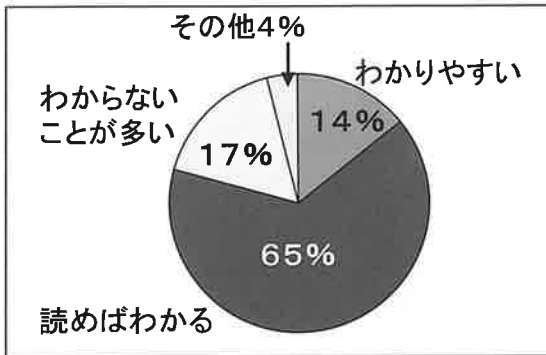
言の波を読んでいるか



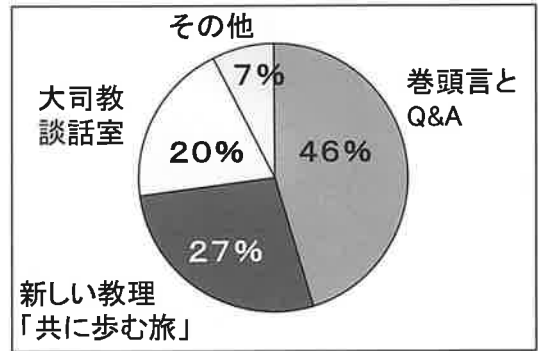
必要度



内容について



好んで読んでいるコーナー



この度約10年にわたり発行されてまいりました『言の波』が4月号をもちまして、しばらく休刊することになりました。この間各方面よりご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

特に前事務局長の橋本勲神父さまの大変なご苦勞を労いたしたいと思います。また、同時にこれまで『言の波』に投稿して下さいました数多くの方々はこの場をかりまして、心より御礼申し上げます。有難うございました。

『言の波』が果たした役割は計り知れないものであります。今後は新しい形での『言の波』の誕生をお待ち下さい。

2015年は信徒発見150年を迎えることとなります。『言の波』が長崎教区の信徒の心に新しい信仰の息吹をもたらすこととなるでしょう。

今後とも皆様方の心からのご協力をお願いしながら、お礼の言葉とさせていただきます。

『言の波』休刊

教区本部事務局長

小瀬良 明

生活教会 の中の



東長崎教会

フォトプラン 山本 富夫

二十五年

日見峠を越え矢上方面へ降ると、鐘楼を備えた美しい教会堂が迎える。

一九五五年、聖母の騎士東長崎幼稚園が開園し、一室を聖堂とした。

一九六二年、修道院を建築、中に小聖堂を献堂し、本河内の巡回となった。

一九八五年、信徒数の増加に伴い、東長崎小教区として分離独立。

一九九五年、新聖堂落成。

約二〇名から始まった信仰の種は大きく成長し、一〇〇〇名程にもなった。

設立二十五周年を迎えた小教区と教会堂は今、新興の地にあって園舎と共に福音の息吹を発している。